

戦乱と干ばつの中で

用水路を拓いた日本人①



みなさんは、アフガニスタンと聞いて、何を思い浮かべる
 でしょうか。武装組織による殺戮や戦乱が続く不毛の大地、一時は、
 テロ首謀者の潜伏先とされ、空爆の様子も報道されてきました。
 そんな戦乱と大干ばつで荒廃した土地を一人の日本人
 が、1600本の井戸を掘り、用水路を拓き、緑の大地に
 変えていった話をご存じでしょうか。



中村哲さんは、もともと日本人医師として、「ペシャワール会」というNGO(非政府組織)を支援母体にして、パキスタンとアフガニスタンで医療活動を行っていましたが、2000年から始まった大干ばつの影響で、多くの子どもたちが、栄養失調から病気になったり、母親の胸の中で息を引き取るのを目の当たりにします。

水・食料不足による栄養失調や病気を解消するためには、100人の医師を連れてくるよりも、1本の農業用水路を作って、荒れた田畑を灌漑し、現地の人たちが自らの手で食べていけるようにした方が、多くの命を救える、そのために7000メートル級の高山を源流とする大河クナル川から水を引き、用水路を作るという「緑の



大地計画」を立案、住民を説得します。人員が足りず、周辺の農民たちに参加を呼びかけると、戦乱や干ばつが起きる前の肥沃な穀倉地帯がよみがえるのならと多くの農民が、また難民キャンプからも、元戦闘員であった人達

までもが、用水路を作るのを手伝いました。

しかし、周辺ではまだまだ戦闘が続く中、水量が多く、流れの早いクナル川に堰を作るのは、困難を極めました…。【来月号に続く】

(ペシャワール会会報より一部抜粋)

※この啓発ピラへのご意見、ご感想は
 ☎0745-82-2147または jinken@city.uda.lg.jpへ